

# 平安時代の典籍の装訂

中央図書館 森 上 修

東洋や西洋の古典籍について、その該博な知識をもとにそれらの装訂法を幅広く調査・研究され、古典籍装訂史の研究に多大の情熱を注がれたこの道のわが国の大先達として知られる故田中敬博士（近畿大学初代図書館長）の偉業は今に燦然と輝いている。

『図書学概論』をはじめとして『粘葉考』や『図書形態学』などの名著を世に残されたわけであるが、博士の典籍装訂に関するこれらの研究業績は高く評価されており、その篤実な諸論考は後進に裨益するところきわめて多く、われわれはその学恩に深く感謝しなければならない。

ところで、こうした古典籍の装訂法に関する研究は、博士のあと長らく停滞のきらいがあったが、近年になって殊に中国や日本の古典籍を対象とした研究が相次ぎ、注目すべき所論が展開されている。

李致忠（北京図書館）、森 縣（宮内庁書陵部）、大内田貞郎（神戸親和女子大）、仲井徳（関西大学総合図書館）諸氏らの調査・研究がそれで、書誌学界のこれまでの通説に対して新たな視点からの再検討が加えられつつある。先ごろ筆者も、中国・唐末～北宋期の古典籍装訂法について調査結果の概要をまとめ、私大図書館協会阪神地区書誌学研究会の例会で、参考図を付して口頭にて報告する機会を得たが、ここでは主としてわが国の平安時代における典籍の冊子装訂法に関する事柄をとりあげ、そのことを中心に少し述べてみることにしたい。

木版印刷は中国の唐代のはじめごろに始まったとされている。当初は一枚物か、あるいはそれらを横長に糊継ぎした巻物の印刷物

が主であったと考えらるが、摺刷した用紙を半折して冊子の形に仕立てた木版本が出廻るようになるのは十世紀後半の北宋時代に入ってからのことである。

こうした北宋本の出版は、儒・史・文・医学など広汎な学問分野に及んだが、それらの〈宋版〉は、当時の入宋した学僧らによって、いち早くわが国へも齎らされた。

平安時代の中期、藤原氏の氏長者として栄華をきわめた、かの左大臣・藤原道長はこのほかこの〈宋版〉の収集に執心であったようである。

寛弘7年（1010）11月、一条天皇へその道長が、所持していた〈宋版〉の『文選』・『白氏文集』を献上したことが『日本紀略』に記されている。

しかし、このころはまだ京洛の地ではそうした新渡の〈宋版〉の覆刻とか国書類の刊刻などは行われなかったようである。冊子形の木版本がはじめてわが国に登場するのは、それより百年近くも経過した平安末期の院政時代に入ってからのことであったと考えられる。

南都・興福寺の開版とみられる『成唯識論了義灯』（永久4年＝1116、奥書）や京洛で上梓された『法華玄義釈籤』（久安4年＝1148、願主僧良鑑刊）など数本が伝存するが、そのいずれもが法相・天台関係の仏書に限られていた。

中国の〈宋版〉が稜角の鋭い印刷体の字様で各葉とも片面だけに摺刷されているのとは異なり、これら平安朝の冊子刊本は、筆書による写経体の字様で両面に印刷されていて、半折した各葉の折目の外縁に糊付けを施した

〈粘葉装〉と呼ばれる装訂に仕立てられているのがその特徴である。

△粘葉装▽



これは、そのころ行われていた〈粘葉装〉の書写本の仕様をそのまま再現した刊本であり、わが国独自の版本形式として注目される。当時の書写本は、その成冊方式としてこうした〈粘葉装〉かあるいは縫綴じによる〈綴葉装〉や〈大和綴じ〉の装訂に仕立てられていた。

〈粘葉装〉の写本としては中国の西辺に位置する敦煌の石室から、八世紀後半の書写とみられる『文心雕龍』が発見されているが、わが国の伝存本では入唐僧の空海が大同元年（806）にかの地から持帰った『三十帖策子』がもっとも古い写本として知られている。

また、天安2年（858）に帰朝した天台の入唐僧・円珍も冊子本の書写經典を将来していたことが『円珍入唐求法惣目録』にみえるが、これらも〈粘葉装〉であったろうか。

そして、寛和2年（986）年に帰国した入宋僧・奝然もまた〈粘葉装〉の写本をもたらしており、先年、嵯峨・清涼寺にある釈迦如来像の胎内から『奝然繫念人交名帳』が発見されている。

これに続くものとしては、永延元年（987）書写の『金剛界儀軌』や天喜五年（1057）書写の『顕密二教論』などがあり、ほかに応徳元年（1084）書写の『伝述一心戒文』が叡山・延暦寺に伝存することが確認されている。

次に〈綴葉装〉というのは、数枚の用紙を

重ねて半折し、その一括り分を幾つか合せて、表と裏に表紙を添え、折目の折谷個所を細糸で互いに縫綴した装訂のもので、その両面に書写されているのが普通である。

△綴葉装▽



また、〈大和綴じ〉といわれる装訂法は、半折した本文を下綴じしたあと表と裏へ表紙をあてがい、その上から右端近くの下へ二箇所づつ孔をあけて組紐を通し、表表紙の上で飾り結びに綴じ込んだ仕様のものである。

これには（イ）・（ロ）二通りの型式があった。

（イ）型式は本文を〈綴葉装〉に縫綴したもの。

（ロ）型式は一枚づつ袋折りに半折した各葉の折目を左側へ揃えて重ね、その右側を下綴じしたもの。

△大和綴じ▽



（イ）の最も著名な事例としては、河内本『源氏物語』（正嘉二年=1258、名古屋市蓬左文庫蔵・重要文化財）があげられよう。

平安中期の紫式部が執筆したこの『源氏物語』は、もと一体どのように装訂されていたのだろうか。ところが、残念にもそのころの原本が伝わらないため確かなことはよくわからない。

しかし、『紫式部日記』には当時の書写本冊子にかかわる記事が散見し、〈大和綴じ〉の装訂による冊子本が、平安中期に確かに存在していたことが知られる。

かりに、当時、その〈大和綴じ〉の装訂になる『源氏物語』があったとするならば、その装訂方式は（イ）・（ロ）の果していずれの型式によっていたのだろうか、この点、大

いに興味がひかれるところである。

ところで、国書の古典類にはこのような糸綴じによった〈綴葉装〉や〈大和綴じ〉の古写本が多く現存し、中国にはそのような装訂形式の冊子本は伝存しないとして、従来これらの装訂法は、わが国で独自に創案された方式であると考えられてきた。わが国文学界では、この見方が定説となって今日におよんでいる。

しかしながら、注意の眼を中国の冊子本に転じてよく調べてみると、五代期の〈古鈔本〉の中には明らかにわが国の冊子本のそれと相通ずる装訂方式の祖形の存在が確認できるのである。

従って、この〈綴葉装〉や〈大和綴じ〉の装訂法をわが国での創案になるとするこれまでの定説には、改めて検討が加えられなければならないことになろう。

〈粘葉装〉をはじめとするわが国でのこうした書写本の冊子形態は、そもそもが中国（唐～五代）の冊子装訂法を伝襲するものであり、それらはその原姿を和風にやや改変しながら派生した副次的な装訂であったと解すべきではなからうか。

〈綴葉装〉の伝存写本については、これまで元永三年（1120）の奥書を伴う『古今和歌集』が最古のものと言われてきた。

しかし、ほかにもそれより年代の遡る天永二年（1111）の識語がある仏書の『金剛般若集験記』や十二世紀初頭の書写と審定される『日本靈異記』（重要文化財）なども現存しており、このことが、先年、山本信吉博士らの調査によって確認されている。因に、この両書はともに天台宗の大原来迎院の所伝にかかわる書写本なのである。

〈綴葉装〉の呼称は、戦前に日本書誌学会で採用された新造語であるが、実はここで留意しておきたいのは、こうした装訂による〈綴葉装〉の写本が、敦煌石室からも発見されているという事実である。

このことは、先年、仲井徳氏が大英図書館のA・スタイン・コレクションを実査された

際、そのうちの『妙法蓮華経』が、紛れもない〈綴葉装〉の五代写本であることを確認され、紹介しておられるところである。

また、このような装訂の五代写本は、北宋時代に中原ではなお少なからず伝世していたことが当時の文献によっても知られるのである。

北宋期の蔵書家であった王洙は、こうした装訂法を指して、その『王氏談録』に、これを〈縫綴〉と記しており、また南宋期の張邦基はそれを受けて、『墨莊漫録』にそのことを〈縫績〉と述べている。『王氏談録』では〈粘葉〉と〈縫綴〉の両語が対称的に用いられているから、従って、この装訂法に対して戦前に付与された〈綴葉装〉の呼称は、そもそもが適切を欠くものであり、本来は中国の北宋期に使われていたこの〈縫綴〉の語に従い、〈縫綴装〉とすべきであったということになろう。

わが国で〈綴葉装〉といわれる、こうした〈縫綴装〉の成冊法が中国において何時ごろ出現したのか、その時期は定かでない。

しかし、おそらく唐代の末ごろにはこの〈縫綴装〉は、中原においてもかなり普及していて、それが当時の遣唐使や入唐僧らにより〈粘葉装〉の方式とともにわが国へ伝えられ、やがて貴紳・縉流の間でそれらに倣ってこうした方式の書写本の装訂法が次第に採り入れられるようになったのではなからうか。

北宋時代になって、中国では木版による官版の刊行が開始されたが、蜀版の刊経に続く冊子形の〈宋版〉は、そのいずれもが木版本の通例として片面摺刷によっていた。

そして、その装訂法には、印字面を内側に半折して各葉の折目の部分を糊付けする、きわめて特異な方式のもの（宋版のこの装訂のものを明代より特に蝴蝶装と呼ぶ。その粘接方法は写本の〈粘葉装〉と全く同じ。）と、その反対に、各葉の印字面を外折りにしてその右側の部分を紙捻で下綴じする方式（包背装）との二通りがあった。

〈蝴蝶装〉の宋版は、片面印刷によってい

るため裏白の部分が一葉ごとに現れて印字面が連続せず、冊子本としては翻閱に至って不便なものであった。

それは、摺刷紙を内側に半折した折目の外縁にだけ粘接が行われていて、裏側の全面には及んでいないためである。元来、この装訂は、唐・開成石経の墨拓剪装本に倣った五代・後唐の馮道らによる陰刻刊本『九経』の古式の成冊法に由来し、それを変形して伝えるものと解される。墨拓紙を貼付した台紙の各葉を内折し、その裏白部分の紙面全体を粘接することを原則とする剪装本の成冊方式が、北宋版の量産過程でいつしか崩れてしまい、成冊段階での省力化に伴い、そのころの両面潤筆になる書写本の〈粘葉装〉と同じ方式の、簡略な粘接法が採り入れられるようになったのであろうか。

この〈蝴蝶装〉に対し、外折りの摺刷紙を下綴じして、その背部を一枚表紙で包む〈包背装〉の宋版は、印字面が全丁にわたり連続するという利点があるが、李致忠氏はこの装訂法の出現時期を南宋ごろと推定されている。

ところが、現存する冊子本の北宋版についてよく考えてみると、それらはそのすべてが必ずしも〈蝴蝶装〉の装訂によっていたとは断定できないようである。

とすれば、こうした〈包背装〉の装訂法もすでに北宋に時期から〈蝴蝶装〉と並んで行われていたということも考えられるのではなかろうか。

北宋朝の出版は、唐代より発達していた蜀地方の木版印刷の技法を導入して開始されたのであるが、その蜀の成都では、五代後蜀の時代に宰相であった母昭裔が『文選』や『初学記』・『白氏六帖』などのほか、学館の学徒用に『九経』の刊行を手掛けていた。

これらの五代蜀版は、中原における伝統的な陰刻石経の墨拓剪装本などとはおよそ関係なく、唐代からの蜀版の方式を継ぐ陽刻の刊本であり、印字面が連続する外折りの装訂に仕立てられていたものと推測される。

摺刷した用紙の印字面を外側に袋折りする装訂法は、片面一度刷りを一般原則とする木版印刷ではもっとも理にかなったごく自然の成冊方式であるといえよう。

余談になるが、敦煌の石室からは、蜀地方で刷られた唐代の木版印刷物や、蜀刊の仏典を転写した卷子本が発見されており、当時の蜀・成都と敦煌地方の間には、明らかに少なからぬ交渉の事実があったことが知られる。

敦煌の遺書中には、本文を〈綴葉装〉に仕立て、それをさらに一枚表紙で包背した〈綴葉装〉と〈包背装〉の混合形とも言える装訂の五代写本が確認されているが、これなども、成都や中原あたりで行われていた書写本の装訂法が、敦煌地方へ伝播していたことを如実に示すものではなかろうか。

蜀地方は古くより絹糸の生産地であったと言われるから、あるいは、五代の蜀版には表・裏に表紙を伴う線装様の仕立てに近い装訂の刊本などもすでに存在していたかも知れない。

そして、こうした外側に袋折りした五代蜀版の装訂法が、建国後まもない北宋朝に伝えられ、やがてそれらが宋版の〈包背装〉本や、あるいは簡略形式の〈線装〉本として登場するに至ったのではないかと考えられる。

前述のとおり、わが国の〈大和綴じ〉の装訂法には二通りがあるが、そのうち各葉を外折りにしてその折目を左側に揃え成冊する片面書写の（ロ）型式については、明らかにこの袋折り形式の〈宋版〉に類属するものとみなされる。片面書写の外折り方式は、そもそもが木版冊子本の成冊法を反映するものであって、両面書写を前提とする、従前の書写本の常態に異背するものと言えるのである。

やはり、わが国での発明と言われているこの（ロ）形式の〈大和綴じ〉もまた、元来はそうした体裁に近い〈宋版〉があって、それに倣った装訂法の一つであったと考えてよいであろう。

つまり、本文の用紙を外折り袋綴じにした

〈宋版〉のある種の装訂法を見倣い、表紙には和風の羅表紙を用い、彩色した組紐を表紙紙の上で結び綴じにする、優麗典雅な装訂法が平安後宮であみ出され、やがてそれがこうした〈大和綴じ〉の装訂として定着し、その周辺へ波及したのではないかと推察されるのである。

いずれにしても、平安時代は未だ木版の印刷本は、卷子本を含めてもきわめて少なく、依然として書写本の全盛期でありそれらの書写本のうち冊子形式のものは、いずれも〈粘葉装〉か〈綴葉装〉あるいは〈大和綴じ〉といった装訂に仕立てられていたわけである。

そして、それらは例外なく、すべてが中国の〈古鈔本〉や〈宋版〉などの装訂方式に準拠するものであり、根源的にわが国での創出になるものではなかったとみて大過はないであろう。

また、冊子形の仏書の印刷がこの時代の末期から開始されたが、それらの版本は、いずれも写経体の字様で両面に摺刷が行われていて、当時の〈粘葉装〉の書写本と全く同じ様式に仕立てられていた。

従って、平安時代の冊子刊本は、中国から将来された〈宋版〉の字様や版式とはおよそ異なる独自の版相を呈しており、この点がその大きな特徴として指摘できる。

なお、蛇足ながら次の鎌倉時代に至って〈宋版〉の版式に倣う〈蝴蝶装〉や〈包背装〉、〈線装〉といった装訂の冊子本の開版が、泉涌寺や禅宗関係の諸寺院などを中心に行われるようになる。ところが、このころから、それと平行して開版されだした〈高野版〉や〈浄土教版〉などは、なお依然として前代からの書写本形式を遵守した、写経体・両面摺刷の〈粘葉装〉刊本であったということをごここに付記しておきたい。

